

# 李滂と白堅

——李盛鐸舊藏敦煌寫本日本流入の背景——

高田時雄

## はじめに

李盛鐸が所藏していた敦煌寫本計 432 點は 1936 年、京都大學教授羽田亨の手に渡った<sup>1</sup>。羽田は 1938 年 11 月京都大學總長に選任されて後、これらの經卷を總長室に保管し、折に觸れて研究を進めていたが、大戰末期の 1945 年夏、資金提供者の要請により戦火を避けて總長室から搬出され、兵庫縣の山間に疎開された<sup>2</sup>。これらには李盛鐸舊藏分以外の寫本も含まれ、總計 736 點に上る。現在すべて資金提供者の經營に係る某企業の財團圖書館に所藏されていることは、研究者のあいだでは公然の祕密と言ってよい。中でも李盛鐸舊藏寫本はその傳來の由來が確實であり、且つ相當の規模を有するコレクションであるため、今日に残された敦煌寫本の最も有望な鑛脈として國際的な注視の對象となっている。では李盛鐸の所藏していた敦煌寫本は如何なる經緯で日本に流入したのであろうか。本稿ではその取引に關與した重要人物、李滂と白堅について考察し、その背後狀況に對し少しく探ってみたいと思う。

## 一 李滂

### 出生の祕密

李盛鐸の晩年、専ら木犀軒藏書の管理に當っていたのは第十子の李滂であった。李氏の死後 1939 年末に木犀軒全藏書を 40 萬元で當時の北京大學に讓渡したのもこの人物であったことは比較的よく知られている<sup>3</sup>。敦煌寫本についても同様である。李盛鐸舊藏敦煌寫本には李盛鐸の數種の印章に加えて、しばしば「李滂」

<sup>1</sup>高田「明治四十三年(1911) 京都文科大学清國派遣員北京訪書始末」『敦煌吐魯番研究』第7卷、2004年、13-27頁、その「與李盛鐸的因縁」の一節を参照。

<sup>2</sup>この間の事情については、落合俊典「羽田亨稿『敦煌祕笈目録』簡介」『敦煌文獻論集』（遼寧人民出版社、2001年、91-101頁）に詳しい。

<sup>3</sup>蘇精『近代藏書三十家』臺北、傳記文學出版社、1983年刊、28頁。鄭偉章『文獻家通考』（中華書局、1999年）下冊1532頁、林申清『明清著名藏書家藏書印』（北京圖書館出版社、2000年）218頁の記述もこれに據っている。但し張玉範「李盛鐸及其藏書」（もと『文獻』1980年第3輯、

の印記が見られることから（圖1）、李盛鐸晩年には李家の敦煌寫本がすでに李滂の手に委ねられていたことが想像できる。李滂、字は少微、1907年10月8日の生まれである<sup>4</sup>。李少微の如く、字で行われることが多い。家學を承けて目錄學に詳しく、30年代には北平民國大學において目錄學教授であったという<sup>5</sup>。さてこの李滂という人物には、實は横溝菊子という一日本人女性と李盛鐸との間に生まれたという出生の祕密が隠されていたと言え、果たして讀者は驚かれるであろうか。

しかしこの瞞の母を捜し求める中國青年學徒の一件は、昭和十年（1935）九月十日、十一日の東京各紙の紙面を賑わした話題で、當時の日本人の多くが聞き知った事實であった。その経緯はこの出來事がある間もなく刊行された『李母横溝宜人傳略』所收の李少微「生母横溝宜人傳略」（【資料1】）及び白堅の「書後」（【資料2】）とにより窺い知ることができる。【資料3-1】～【資料4-3】として附載した新聞記事は、故意に假名を使ったりすることはともかく、事實と齟齬する點も間々あり全面的には依據しがたいが、當時の雰圍氣がよく傳わるという意味では好材料なので、煩を厭わず収録することにした。他の材料と併せて、以下簡単にこの事件の経緯を振り返ってみよう。



圖1: 李滂の印記

光緒三十一年八月二十七日（1907年9月25日）、順天府丞であった李盛鐸は駐ベルギー欽差大臣の命を受けたが、未だ出立に及ばない翌九月、兼ねて出洋考察憲政大臣の列に加わることを命じられた<sup>6</sup>。出洋大臣は二手に分かれて出發することとなり、かくして李盛鐸と載澤、尚其亨からなる後發の一行は、ようやく同年十一月十五日、日、英、法、德、比の諸國にむけて出發した。李盛鐸は、すでにそれ以前、光緒二十四年から二十七年まで、足かけ四年のあいだ駐日公使として勤務した経歴があり、日本は曾遊の地であった。一方、横溝菊子は日本労働運動の創始者として著名な高野房太郎（1868-1904）の夫人であった（圖2）<sup>7</sup>。高野

---

今『木犀軒藏書題記及書録』（北京大學出版社、1985年）所收の修訂稿431頁）は北京大學への賣却を1940年としている。讓渡契約、圖書の受渡、代金の授受などそれぞれ時期がずれることは大いに豫想されることで、最終的に圖書が大學に搬入されたのは1940年になったからの可能性が高いが、今細かな點を穿鑿することは本稿の趣旨とは関係がないので觸れない。

<sup>4</sup>李少微『李母横溝宜人傳略』（1935年李氏刊本）による。外務省情報部編纂『現代中華民國滿州帝國人名鑑』（昭和12年版）には1902年生まれとするが、恐らく誤りであろう。

<sup>5</sup>蘇精、鄭偉章の前掲書に據る。なお鄭偉章氏によれば、李少微の目錄學に関する著作として『千元考』、『滄亭警觀録』、『近世藏書家概略』等があるというが、筆者はいまだ寓目の機會を得ない。

<sup>6</sup>これはもと五人の出洋大臣の發程に際して、光復會の志士吳樾が爆彈を投げたことで負傷者を出したため、出發が延期となり、人員についても調整が行われていたのである。

<sup>7</sup>『李母横溝宜人傳略』所載の寫眞による。

は日本における活動が行き詰まりを見せたことから、1900年中國青島に渡り商業に従事していたが、不幸にして1904年3月12日彼の地で死去した<sup>8</sup>。菊子は二人の子供を連れて日本に歸り、親戚のもとに身を寄せ、辛うじて生計を立てた。そんな中、菊子が少しく中國語を解することから、中國公使館に勤務していたのだとされる。その間の経緯は明かでないが、やがて李盛鐸の旅行に同行した菊はベルギーにおいて一子を出産、それが後の李少微その人である。李盛鐸が宣統元年(1909)駐ベルギー大臣を退き、歸國して天津の唐紹儀の別宅にいた頃、東京からの知らせで肉親の病状が重篤であると知り、菊子はまだ幼い子を置いて一人東京に歸って行った。それ以來、母子は相まみえる機会もなく、長年月が経過した。

長じてから益々生みの母に對する思慕の念を募らせた李少微は、知り合いの白堅がしばしば日本へ渡航することから、是非日本で自分の母親の消息を探ってくれるように依頼する。1935年の春上海でのこと、白堅に向かって李少微のいうには「自分は庶出の子であって、生母は横溝菊子という日本人である。母が自分と別れて日本に歸ってから二十五、六年になるが、一切の音信がない。ぜひ會いたいとは思いますが、方法がない。あなたはしばしば日本に出掛けるのだから、探しては呉れまいか」というのである。白堅は應諾して、早速友人の江藤濤雄に手紙を書き、氣をつけておいて欲しいと言いやったところ、暫くして江藤が返事を寄越した。李君の至情に感じ入ったので、多方探してみたけれども分からない。先日易者に尋ねてみ



圖 2: 横溝菊子

たら、易者の言うには「横溝氏は秋田縣人で、今も生きている。近く會えるでしょう」とのことであった。そこで七月の末に白堅が東京に行った時、江藤氏の言もあるので期待していたところ、五十日経っても音沙汰がない。九月九日に畫家の結城素明が白堅を食事に招き、その席上、李少微の母親探しに談が及んだところ、結城は警視廳へ行くのが一番だという。そこで翌日警視廳へ行って相談したところ、在京各紙の聞きつけるところとなり、國際「瞼の母」だの今様「和藤内」だの

<sup>8</sup>横溝菊子の生涯については、高野房太郎の妻であったことから、日本労働運動史の研究者によって言及されることがある。なかでも二村一夫「高野房太郎とその時代(99)」『二村一夫著作集』第6巻(オンライン版)が詳しく、また關口正俊「その後の房太郎」『Report: 情報労連リポート』(2001年4月號所収「労働組合の社會學」第53回)が上記新聞記事を素材に扱っていて参考になる。

とセンセーショナルな記事となったのであった。

しかし新聞の効果は著しいもので、9月10日の夕刊を見た杉竝に住む岡本小枝子という女性が、早速翌日の未明に赤坂山王ホテルの白堅を訪問し、横溝菊子のその後の消息を傳えた。岡本小枝子は上海で菊子と知り合い、歸國後も付き合いがあったが、悲しいことに菊子は大正三年一月廿二日に三四歳の若さで病没したという。亡骸は駒込の吉祥寺の高野家の墓に埋葬してあるというので、白堅は結城畫伯と同道して墓に詣った。長年捜し求めた生母がすでに早く死んでいたという知らせを受けた李少微は、東海に向かって胸をかきむしり血の涙を流したというが、やがて氣を取り直し、追悼會を開催して<sup>9</sup>菩提を弔うとともに、『生母横溝宜人傳略』を刊行した。またその後、李滂自身が日本に来て墓參をしたという言い傳えもある<sup>10</sup>。

### 敦煌寫本の賣却

さて上に述べた母親探しが白堅の日本渡航の主目的であったとは到底考えられない。李滂の依頼を受けて母親探しに盡力した以外、別に重要な用件があったに相違ない。筆者の推測では、その用件もまた李滂の委託によるものであったと思われる。いずれにせよ白堅は1935年の7月に來日し、秋口になって東京へ出てくる以前は京都に滞在していた。白堅がこの年の7月に長尾雨山に贈ったという書物が現存しており、同書の封面に記された獻呈辭には「歲在乙亥盛夏七月自上海來游平安之都、新得此集、謹以呈雨山先生吟壇 西充白堅」とある<sup>11</sup>。これによっ

<sup>9</sup>中國東北地方の某ウェブサイト上に青坡山人が描いたとされる繪畫とそれに瞿中溶、魏標、陳文述、徐渭仁の題詩を上下に貼り付けた(?)ものが掲載されており、所藏者李國文氏による「神游汲古醉詩香——青坡山人繪《滿城風雨近重陽》賞析」という一文が附されている。實物を見ないので斷言はしかねるが、極めていかがわしい代物で、殊更に取り上げるのも憚られるが、我々にとって興味深いのは、最下部に李盛鐸の詩が添えられ、末尾に「乙亥秋日 李盛鐸題男少微錄」と注し、さらに「支那考古學者/李滂實母横溝/大人追悼會印贈」という墨印が鈐されてあるという事實である。「印贈」とあるからには印刷物であり、追悼會に列席した人々への記念品であったという推測も可能である。いずれにせよこのようなものが存在していることから、乙亥(1935年)の秋に李滂が生母横溝氏の追悼會を催したことが確認できる。ちなみにこのサイトは「大東北文博館」と稱し、アドレスは<http://www.ldb.cn/www/liguowen001.htm>である。

<sup>10</sup>關口正俊氏は、二村一夫法政大學名譽教授からの又聞きとして、次のような話を筆者に披露された。來日した李滂は墓參後、義理の姉にあたる「原田みよ」を訪問しようとしたが、周囲の配慮によって直接會わせることをせず遠目に「みよ」を見せたということが、大原社會問題研究所では語り草になっていたという。現在法政大學の附屬研究所となっている大原社會問題研究所は、1919年大阪に設立され、横溝菊の夫高野房太郎の弟高野岩三郎が初代の所長であり、當時もなおその職にあった。後掲【資料4-1】にも見られるように、高野岩三郎は公式には李滂が横溝菊の産んだ子であることを否定していたから、李滂と原田みよを面會させなかったのは、高野岩三郎の意を汲んだ措置であったと思われる。

<sup>11</sup>中林史朗「色刷り本」『大東文化』第468號(1995年7月)に紹介される郭祥正『青山集』が

て、白堅が京都に居たことは明らかだが、では白堅は京都で一體何をしていたのか？ 翌1936年の2月以降、李家の敦煌寫本は續々と羽田亨のもとに送り届けられた<sup>12</sup>ことを考え合わせると、この時白堅が羽田と李家の敦煌寫本の讓渡に關する商談を行っていたと推測することは決して的はずれではあるまい。後で白堅の項において詳しく述べるつもりであるが、彼はこうした文物の仲介を生業としていた。

この時、白堅が羽田亨に會ったという證據を筆者が持ち合わせているわけではない。しかし【資料3-1】の東京朝日の記事に「一子李君は長ずるに及んで我國に學び<sup>13</sup>、京都帝大羽田博士等に愛され考古學の研究家として有數な今日を築き上げた」と言い、また「李君は年は若いが支那古版本の研究では世界的權威です。京都帝大の羽田教授から博士論文を出して見てはという話があったが、父君から——お前はまだ若い、もっと深く研究するまで待て——といはれたので日本の大學へ論文は出さないでいる」という白堅の語を紹介しているところを見ると、李滂と羽田との間には以前よりかなりの連絡があったものと見なければならぬ。羽田は1910年の10月、内藤湖南の紹介で天津の英租界黄家花園にあった李盛鐸宅を訪れ、景教經典を書き寫した<sup>14</sup>。羽田と李家との最初の接觸であるが、その後も何らかの連絡があったものであろう。李盛鐸は晩年になって訴訟をかかえたりして經濟的に困窮しており、藏書の處分を考えねばならない状況に追い込まれていた。實際その衝に当たったのは李滂であるから、上海で李滂と白堅が面談したときには、母親探しの件はむしろ付け足りであって、敦煌寫本の讓渡先の物色こそが中心テーマであったであろう。白堅は上海在住であり、李滂はその相談のためにわざわざ天津から出掛けていったのである。李盛鐸の敦煌寫本賣却について言えば、

---

それで、ウェブ上でも見ることが出来る。

<sup>12</sup>上掲の高田「北京訪書始末」、21頁。

<sup>13</sup>「長ずるに及んで我國に學び」というのが日本に留學したという意味なら、それは事實だとは考え難いが、新聞記事でもあり、深く追及しない。

<sup>14</sup>その時の様子を羽田自身が次ぎのように書いている：「十月七日、天津英租界黄家花園に李氏を訪ひ、手軽にこの景典を手交されて、始めて年來の渴望を醫するを得た。…(中略)…さて一應閱覽した後に偶然北京より同行した杉村勇造氏の助を受け、即座に全卷百五十九行を抄了することを得た。李氏は、更にこれを寫眞することをも快諾されたのであったが、不幸にしてその日の午後から自分が俄に病気に罹った爲、遂にその機會を失ったのは遺憾に堪えぬ。」(羽田「景教經典志玄安樂經に就いて」『羽田博士史學論文集』下卷、京都・東洋史研究會、1958、271頁。)またその時同行した杉村勇造の回想も當時の雰囲気がよく傳わり参考になる：「羽田先生はよく私に『あの時は』といわれた。それは昭和三年の秋、二人で天津に隱栖していた李盛鐸氏を訪問し、景教の安樂經を寫した時のことであった。誰れにも見せていないものを見せられたばかりでなく、書寫することを許されたので、先生は大喜び、私が御機嫌を損じないように老人と雑談している中に寫しとって後に研究刊行されたが、これには中國の學者達も呆然として驚いていたのだから、先生には得意な場面であったのである。」(杉村勇造「羽田先生の思い出」『東洋史研究』14-3附「羽田博士追悼録」5頁。)

『中央時事週報』に「徳化李氏出售敦煌寫本目錄」が掲載されたのは1935年12月のことであるが、實はその時点ではすでに李家と羽田との間で話は纏まっていたものと見なければならぬ<sup>15</sup>。

李家の窮迫した状況を打開するため、李滂が敦煌寫本の賣却を決断するに至ったとき、實母の祖國に買い手を求めたとしても、決して不自然ではない。むしろ羽田亨が敦煌寫本の蒐集に非常な熱意を有していることを知ったとすれば、李滂のほうからアプローチしたというすら考えられよう。以上、李滂が李盛鐸と日本人女性横溝菊子との間に生まれた混血兒であり、實母の祖國である日本に對して非常な親愛の情を抱いていたであろうこと、したがって李家の敦煌寫本が羽田のもとに齎される素地は十分に整っていたであろうことを見た。

### その後の李滂

李家の敦煌寫本を賣却してから約5年後、李滂は李家の全藏書を舉げて北京大學に讓渡したことは、すでに上に觸れておいた。ではその頃李滂はどのような暮らしをしていたのであろうか？ その動靜については不明な部分が多い上、本稿の主題とは關係がないが、僅かに知り得た一二の事柄を記しておこうと思う。

注4で言及した昭和十二年（1937）年版の外務省情報部編纂『現代中華民國滿州帝國人名鑑』には、李滂の項目を立てて「河北省太興縣人。一九〇二年生。原籍江西省九江縣。元駐日公使李盛鐸の第十子にして、母は日本人横溝菊子。津浦鐵路貨捐總辦たりしことあり。東亞經濟協會調查部副部長、東亞協進會宣傳部主任。考古學及び目錄學者。著書は考古學に關するもの多く、その他『黄色人種存亡論』、『横溝夫人傳』等」と解説している。ここには上に見たような民國大學目錄學教授の職は見えないが、東亞經濟協會や東亞協進會といった團體の職名に言及されている。とも



圖3: 李滂

に日本の肝いりで作られた團體と見られ<sup>16</sup>、李滂が日本の大陸政策に次第に深く關與していった軌跡が伺われる。母親探しの新聞記事にすでに「立派な親日家で目下天津で南京政府の仕事を手傳つてをります」（1935年、【資料3-2】）とあるから、その頃から日本に近い立場に居たことは想像できる<sup>17</sup>しかし時局が混迷を深め

<sup>15</sup>筆者は、羽田がこの目錄を眼にした後、極めて迅速に行動したと考えたが（高田「北京訪書始末」、21頁）、そうではなく早い時期に内約があったのであろう。

<sup>16</sup>後者については今ひとつよく分からないが、前者は1935年に高凌霨等によって天津を據點とし「日支親善工作」を目的として設立された。

<sup>17</sup>汪兆銘政府の役職に就いていたことは間違いないと思われる。近年の中國の著作が、例えば「日寇侵華、曾至天津任日偽官員」（鄭偉章『文獻家通考』、1531頁）、「李盛鐸之子李滂在天津汪偽

て行くにつれて、李滂は益々日本の占領行政にも関わっていったらしい。1940年3月、日本占領下において華北政務委員會が成立すると、その管轄下にある河北省燕京道尹（代理）となり、燕京道區聯合討伐隊の總隊長を兼ねた。その時分の寫眞が遺っている（圖3）<sup>18</sup>。1942年の6、7月には確かにその職にあって、“惠民壕”掘削のため人夫の徵發に従事したことを示す文書の存在することが報告されている<sup>19</sup>。日中戦争終結後の李滂については遺憾ながら全く知るところがない。

## 二 白堅

### その経歴

上に見たとおり、李盛鐸舊藏敦煌寫本が日本に渡り、羽田亨の手に歸することになった大きな要因の一は李滂の特別な出生の事情にあると考えられる。ただ賣り手は李滂であるとしても、その取引を實行に移すべく具體的なお膳立てをする仲介者が不可缺だったことは言うまでもない。その役割を擔ったのが白堅その人であった（圖4）<sup>20</sup>。今ではほとんど歴史の流れの中に埋没してしまったかに見えるこの人物について、その果たした役割を検證してみたいと思う。

白堅の傳は明かでない。幸い橋川時雄の『中國文化界人物總鑑』にはこの人物を載せているので、先ずその記事を見ることにしよう。

白堅 1883-x 字は堅甫<sup>21</sup>、四川西充の人。日本に留學して早稲田大學政治科を卒業、國務院簡任職存記、段執政府祕書廳編譯主任、民國二十七年臨時政府内政部祕書に任じ、また師範學院國文教習を兼任。彼れはかねて金石書畫の興趣多く、古石經の殘石をも藏してみた。近く「讀正氣歌圖史集」一卷を著はして印行、けだし師範學院に於ける講稿である、また同好と「餘園詩社」を組織した。その他の著に「讀漢魏

---

政府任職」（林申清『明清著名藏書家藏書印』、北京圖書館出版社、2000年、218頁）などとするのも恐らく別に基づくところがあるのに違いない。ただし橋川時雄『中國文化界人物總鑑』（昭和15年、北京、中華法令編印館發行）の李盛鐸條に「其子滂、字は少微（字を以て通行す）亦頗る嗜書の癖をもち、現に天津縣知事である」（166頁）にいう天津縣知事の職については確證を得ることが出来なかった。

<sup>18</sup>『舊中國掠影』（A Glimpse of Old China）、中國畫報出版社（China Pictorial Publishing House）[1996年刊、2001年修訂版] 19頁。ここには顔の部分だけをトリミングした。この寫眞の存在は關口正俊氏の御指摘によった。この場を借りてお禮申し上げたい。

<sup>19</sup>居之芬「關於日本在華北勞務掠奪體系與強制勞工人數若干問題考」『抗日戰爭研究』2002年第3期、135頁。同「論太平洋戦争爆發後日本強擄虐待華北強制勞工罪行」『民國檔案』2003年第2期、98頁。

<sup>20</sup>『東京日日新聞』昭和10年9月10日夕刊第二面による。

<sup>21</sup>また堅夫、山甫とも云う。さらに晩年には白隆平とも稱したらしい。それぞれ後述の該當箇所を参照。

石經記」、「石居獲古録」（民國二十六年上海圖書館學校出版）など。

「餘園詩社」は日本占領下の北京で結成された詩社で、社員には日中の愛好家が加わっていた。また雅言社を組織し、定期的に『雅言』誌を刊行した<sup>22</sup>。橋川時雄もまた同人の一人であったから、白堅とは面識があったはずで、その記事は大體に於いて信用し得ると見て好いであろう。

早稲田大學に留學後<sup>23</sup>、中國に歸り、「國務院簡任職」に存記（任官候補者リストに載せること）された。簡任職とは民國時期の文官任用方式で、最上位に特任官があるが、その下に簡任、薦任、委任が續き、これらを九等に分かった。その一、二等が簡任職である。國務院或いは國務總理に直屬した。おそらく大學卒業の資格でこの職位が得られたものかとも思われるが、すぐには實職を得られなかったことも推測できる。やがて1924年11月に段祺瑞の臨時政府が成立すると、その祕書廳編譯主任となったらしい<sup>24</sup>。おそらく日本語の能力を買われてのことであろう。1926年「三・一八事件」の責任をとって段祺瑞が下野した後も引き続きこの職に留まったか否かは不明だが、その後の行動を勘案すると、この時點で辭職したと見るべきである。民國二十七年（1938）の臨時政府とは言うまでもなく汪兆銘の南京政府であり、師範學院とは淪陷期北京に置かれた國立師範學院のはずである<sup>25</sup>。段祺瑞の臨時政府に職を得てから、再び汪兆銘の南京政府下で働くまで、およそ十年以上の空白がある。その間、白堅は一體何をしていたのであろうか？ この十年餘こそ本稿の主題と密接に関わる時期であり、出来る限り詳しい調査が必要である。以下この時期の白堅の活動を逐一見てみることにしよう。



圖 4: 白堅

## 書畫の取引

さまざまな材料から白堅の行動を追跡していくと、そこから見えてくるのは書

<sup>22</sup>『雅言』は傳増湘が社長をつとめ、庚辰年（1940）正月から毎月一卷が鉛印線裝本として刊行された。中國國家圖書館のデータベースによれば、この雑誌は1944年まで刊行されたことになっているが、筆者が確認できた最後の一冊は癸未年（1943）巻一である。いずれにせよこの雑誌の評議（員）には白堅と並んで橋川時雄の名も見えている。

<sup>23</sup>但し卒業生名簿にはその名を載せないから、早稲田に學んだにしても卒業までは至らなかったらしい。橋川はおそらく白堅の言うところをそのまま記録しただけであろう。

<sup>24</sup>吳佩孚の祕書長であったとする説もあるが、恐らくは訛傳。「鄧拓收購名畫風波（往事回顧）」『人民日報海外版』2002年12月13日。

<sup>25</sup>1938年5月17日に成立。王謨が院長となり、文、理、體育の3科が設置された。國文組は、教育倫理、日本語文、西洋語文、史地組とともに文科を構成していた。師範學院は1942年の末に、國立北京女子師範大學と合併して國立北京師範大學となって終戦にまで及んだ。



畫をはじめとする美術品のブローカーとしての姿である。橋川が「かねて金石書畫の興趣多く」と書いているように、白堅は書畫の名品を多数所蔵していた。その蒐集は当初、自身の鑑賞愛玩を目的としたものであったかも知れない。しかし彼はやがてそれらを轉賣して利を収めることにも多大な熱意を傾注するようになる。そしてその轉賣先の大部分は日本であった。

1924年、白堅は王樹枏から晉寫本陳壽三國志吳志殘卷を重價で購入した（【資料5-2】）。段祺瑞政府で働いていた頃である。その吐魯番寫本を白堅は後、1930年（昭和五年）、武居綾藏に譲渡している<sup>26</sup>。新疆布政使として約十年のあいだ迪化（今日のウルムチ）に駐筭した王樹枏は、その在任中に吐魯番から發見される寫本の多くを入手したことが知られている<sup>27</sup>。ちなみにそれら寫本のうち可成りの部分（古寫經28卷8帖）はすでに1922年に文求堂田中慶太郎の手を経て二萬圓という金額で中村不折の架藏となっていた<sup>28</sup>。ところで白堅はその中村不折に前後少なくとも數點の寫本を賣却している。まず第一は、上に言及した王樹枏舊藏三國志殘卷に前接する十行の斷簡である<sup>29</sup>。【資料5-3】の内藤湖南跋によれば、この斷簡は武居綾藏へ上記寫本を譲ったのと相前後して中村不折の手に渡ったらしい。常識的には、これら二斷簡は白堅が1924年に王樹枏から同時に入手したものと考えべきであろう<sup>30</sup>。それを二分して別々に賣却していることになる。當然そのほうが利益が多いに違いない。そのほか不折の舊藏寫本で白堅の手を経たことが分かるものとして更に二點が存在する。一は【014】「摩訶般若波羅蜜經第十四」梁天監十一年寫本であり、いま一つは【025】「佛說金剛波羅蜜經」梁大同元年寫本である。前者について云えば、中村不折の『禹域出土墨寶書法源流考』草稿に「……余江藤氏をして割愛の手を同氏（白堅氏）に交渉中震災の爲一時中絶せしも又萬難を排して其三丈五尺完全無缺の梁經は終に弊齋に販せしなり」とあると報告されてお

<sup>26</sup> 【資料5-3】を参照。この寫本は武居綾藏の死後、さらに轉じて朝日新聞の上野家の有に歸した。赤尾榮慶「上野コレクションと羅振玉」『草創期の敦煌學』（知泉書館、2002年）、75頁以下。

<sup>27</sup> 中村不折は自身の蒐集経緯に觸れて、「其後新疆省布政使として迪化に駐在せる王樹枏は其の職に在る十年の間吐魯蕃、鄯善、庫車等より出土せる經卷墨蹟を三十卷に裝して愛藏せるものを金の都合で賣るといふ」ので買ったことを述べている。中村不折『新疆と甘肅の探檢』（法帖書論集解説）、東京、雄山閣、昭和9年、6頁。

<sup>28</sup> 鍋島稻子「不折舊藏寫經類コレクションについて」『台東區立書道博物館所藏中村不折舊藏禹域墨書集成』（文部科學省科學研究費特定領域研究〈東アジア出版文化の研究〉研究成果、東アジア善本叢刊第二集、2005年3月）、巻下、358頁。

<sup>29</sup> 書道博物館の圖録『禹域墨書集成』の圖版番號【140】。以下書道博物館所藏寫本に言及する場合は、『禹域墨書集成』の圖版番號を【 】中に記すこととする。

<sup>30</sup> 中村不折はまた別の吐魯番出土晉寫本三國志（吳志卷二十）を所有していた（圖版番號【141】、存25行）。王樹枏の跋があるので、彼の舊藏であることは分かるが、何時中村不折の手に歸したのかは不明である。白堅がこれにも關與している可能性は零ではない。

り<sup>31</sup>、白堅から長安莊江藤濤雄を経て不折の所有となったことが確認できる。その入手年代は關東大震災（1923）の後間もなくのことであった。ただこの寫卷に附された王樹枏の跋によれば、この經卷は王樹枏から顧鰲（巨六）に贈られたものであることが知られるから、白堅が果たしてこれを誰から得たのかについては些か問題が残る。さらに後者についていえば、卷末に白堅の十一月十八日（但し何れの年かは不明）の識語が見えるから、この寫本が少なくとも一時は白堅の所藏であったことに疑いを差し挟む餘地はない<sup>32</sup>。注目すべきは前者【014】「摩訶般若波羅蜜經第十四」の入手年代であって、もし震災後間もなくというのが事実とすれば、白堅と中村不折との交易の最初の例ということになるばかりでなく、白堅がかなり早い時期から書畫の取引に手を染めていたことの證據となる。想像を逞しくすれば、大正十一年（1922）に田中文求堂から購入した經卷一括二萬圓というのも、白堅が背後に居たのではないかとすら思えるのである。中村不折が最初に古寫經を入手したのは大正三年（1914）のことで、江藤濤雄が蘭州で購求した「草書經三卷」を田中文求堂を通じて納品したものである。文求堂から六百圓でこの「草書經三卷」を購入した同年二月九日付の記録が存在するという<sup>33</sup>。一括二萬圓の經卷には文求堂の領收書が遺っているというから、これも最後の納品者は田中文求堂であることは否定しがたい。しかしこの場合も王樹枏→文求堂→中村不折という経路よりも、王樹枏と文求堂の間にさらに誰か仲介者があったと考えるほうが自然ではあるまいか。筆者は王樹枏→白堅→江藤濤雄→中村不折というような可能性も否定し得ないと思うが、もちろんこれは全く想像の域を出ない。

中村不折はまた梁素文舊藏の吐魯番寫本も相當數購入している<sup>34</sup>。梁素文は王樹枏と同時期に迪化の財務官の任にあり、兩者競い合うようにして多數の寫本を蒐集した。日本國內では現在その舊藏品は書道博物館以外にも、靜嘉堂文庫、東京大學総合圖書館、天理圖書館、京都國立博物館に分散所藏されている<sup>35</sup>。さて現在北京の歴史博物館に所藏される「六朝寫經殘卷」はやはり梁素文の舊藏本であるが、そこに附された吳寶炆の跋文によれば、梁素文は新疆から北京に歸つてのち、その書蹟の名品をすべて奸商の白某に售り、白某はそれを日本に轉賣しようとした

<sup>31</sup> 鍋島稻子上掲「不折舊藏寫經類コレクションについて」、363頁。

<sup>32</sup> 鍋島氏の上掲文には、白堅から得た分としてこの經卷には觸れていない。

<sup>33</sup> 鍋島氏上掲文 358頁。

<sup>34</sup> 「其の他迪化府吏員の梁素文のものも十卷程入ったのである」、上掲『新疆と甘肅の探検』、6頁。鍋島氏上掲文 361頁によれば、実際には計十四卷あるといい、その購入時期を昭和二年後半から昭和五年秋までと推測している。

<sup>35</sup> さらに1990年頃、日本の古書市場には梁素文舊藏寫本が何點か出現した。したがってなおかなりの数が日本國內のどこかに眠っている可能性がある。榮新江『海外敦煌吐魯番文獻知見録』、江西人民出版社、1996年、190-191頁。

が、呉寶炕は辛うじてそのうちの三巻だけを買取ることができたのだという<sup>36</sup>。この白某が白堅であることは言うまでもない。跋文の紀年は民國戊辰(1928)、中村不折が梁素文の經卷を入手したのと時期を同じくする<sup>37</sup>。中村不折がどのようにして梁素文の寫卷を購入したのかに就いては確たる證據となるものがない。鍋島稻子氏は「白許曾という人物が梁素文所藏品を買取り、日本に轉賣したもの」だという一説の存在を紹介しているが<sup>38</sup>、この白許曾というのは實は白堅その人であろうと筆者は推測する<sup>39</sup>。

王樹枏、梁素文の舊藏寫本ばかりではない。白堅が日本への轉賣に手を染めた古寫本は、どうやら他にも存在するらしい。それを次に見よう。近年、京都國立博物館の赤尾榮慶氏等により三井文庫所藏の敦煌經に關する詳しい書誌學的な研究が實施された<sup>40</sup>。また副産物として、展覽會の開催<sup>41</sup>、圖録の出版が行われたことは記憶に新しい<sup>42</sup>。その研究過程で、舊藏者張廣建やこれら經卷が北三井家の所藏に歸した經緯についても次第に明らかになってきたことは幸いである。張廣建は辛亥革命後、1914年から1920年まで甘肅督軍としてこの地に絶對的な權力を築いた軍閥であった。藏經洞の寫本發見者王道士は以前から安肅道臺であった廷棟に相當數の寫本を贈呈していたが、1917年に廷棟が横死すると、それらの寫本すべてを張廣建が襲藏した<sup>43</sup>。その張廣建所藏の寫本は1928年に北京在住の田中

<sup>36</sup>『中國歷史博物館藏法書大觀』第11卷「晉唐寫經 晉唐文書」(1999年、京都、柳原書店)、211頁、插圖13。

<sup>37</sup>不折が梁素文舊藏寫本を入手した時期は、むしろこの跋文によって更に絞り込むことが可能である。

<sup>38</sup>鍋島氏前掲文、361頁。惜しむらくは「一説」の出所が示されていないので、これ以上の追究は叶わない。

<sup>39</sup>白堅は吐魯番寫本のみならず、漢の熹平石經や魏正始石經の殘石を不折に賣却している。鍋島稻子「台東區立書道博物館と中村不折コレクションについて」『台東區立書道博物館圖録』(平成12年4月、4-5頁)によれば、「不折は昭和十七年にこの殘石十三片を中國の學者白堅より購入」し、魏正始三體石經の「斷碑もまた不折の有に歸した」とある。石經はいわば白堅の専門とも言える分野で、自身でも相當數のコレクションを有し、『漢石經殘石集』(民國19年)、『魏正始三體石經五碑殘石記』(民國25年)の專著があった。筆者の調査では、不折の有に歸した熹平石經は『漢石經殘石集』所收のものであるらしい。また書道博物館所藏の三體石經(第三石、第五石)も『魏正始三體石經五碑殘石記』に収録されているが、白堅はその第三石について「今此石歸日本中村不折家」と書き、第五石について「此石今存西充白氏與石居」と書いている。とすれば第三石は第五石より早く、(白堅から購入したか否かは斷言し得ないが)遅くとも民國25年(1936)以前に不折の所有となり、第五石はやや遅れて1936年以後のある時期に白堅から不折の手に渡ったことが分かる。

<sup>40</sup>『敦煌寫本の書誌に關する調査研究——三井文庫所藏本を中心として』(平成12~14年度科學研究費補助金報告書、基盤研究(C)(1)、課題番號12610068、平成15年3月)。

<sup>41</sup>三井文庫別館展示室、2004年度新春展「シルクロードの至寶 敦煌寫經」(會期：1月17日~2月22日)。

<sup>42</sup>財團法人三井文庫編『三井文庫別館藏品圖録 敦煌寫經—北三井家—』、平成16年1月發行。

<sup>43</sup>富田淳「張廣建について」『敦煌寫本の書誌に關する調査研究』、32-33頁。また圖録『敦煌寫

三郎なる人物の仲介によって昭和三年（1928）に北三井家に歸した<sup>44</sup>。田中三郎は北京で病院を經營するかたわら、古錢を中心として古書畫等にも相當な経験を積んだ人物であつたらしく、その關係から新町三井家の當主三井高堅と交際があつたという。この敦煌寫本ももとは新町三井家で購入する筈であつたものが、何らかの理由で北三井家に入ったものと考えられている<sup>45</sup>。ところが葉恭綽が1947年に書いた「張谷雛所藏燉煌石室圖籍録序」（【資料7】）を見ると、「その後張廣建が得た約200卷は、大半が西充の白堅に歸した」と述べられているのである。これを信じるならば、張廣建の寫本はある時期にほとんど白堅の所藏に歸していたことになる。もちろん葉恭綽がこの序文を認めた1947年には、張廣建舊藏の敦煌經はすでに20年近く前に白堅の手を離れて三井家の有に歸していたのであって、葉恭綽はそのことを知らない。田中三郎と白堅を結びつける材料は今のところ存在しない。しかしこの取引の場合、田中三郎が單なる仲介者に過ぎなかったことは、納品目録末の金額内譯に「金壺千五百円 田中三郎手数料」と明記してあることで想像し得る。それ以前に白堅がさらに誰かに轉賣していたという證據がない以上、當面白堅が田中三郎を仲介者として三井家に售つたと考えて然るべきであろう<sup>46</sup>。

中村不折にせよ三井家にせよ、取引先はともに東京方面だが、では白堅と京都との關係はどうだったのであろうか。ここで少し京都の學術界との關係を見ておこう。1925年、内藤湖南は白堅から唐寫本説文解字殘卷を譲り受けた。現在國寶の指定を受け、武田科學振興財團「杏雨書屋」の所藏となっているこの殘卷を、湖南は京都文科大學清國派遣員として同僚とともに北京に赴いた際、端方から見せられた<sup>47</sup>。それ以來、愛着の思い斷ちがたく入手の機會を伺っていた湖南は、大正

經』、54-55頁。

<sup>44</sup>現在、九州大學文學部にも田中三郎舊藏の敦煌寫本が數點所藏されているが、これは田中三郎の死後、嗣子の田中三男氏から昭和24年に九州大學が購入したものだという。坂上康俊「九州大學文學部所藏〈敦煌文書〉の來歴」『史淵』第141輯（2004年3月、1-24頁）はこの田中三郎という人物を追跡した興味深い論考である。田中三郎はまた中村不折とも若干の取引があつたようで、不折は「尚ほ洛陽出土朱書綏和四年の錫壺は其の頃北京に居つた田中三郎氏より送り來り」と書いている。中村不折『新疆と甘肅の探検』、10頁。ちなみにこの錫壺は中村不折『禹域出土墨寶書法源流考』の卷頭を飾っている。

<sup>45</sup>清水實・樋口一貴「三井文庫所藏敦煌寫經の傳來と調査の経緯」『敦煌寫本の書誌に関する調査研究』、17-21頁。同文はまた圖録『燉煌寫經』の47-53頁にも加筆訂正稿が掲載されている。三井文庫には田中の納品目録が遺っており、その表紙に「昭和三年六/十一月兩度ニ田中三郎北京ヨリ持參、今井町三井家御買上、支那甘肅省張廣建所藏燉煌發掘古寫經目録」とあつて、田中三郎が北三井家に納めたものであることは明かである。また目録末には「右代金総額壺万六千五百円也」とあつて、購入代金がかかる。この目録全部の寫眞は上記報告書の12-16頁に掲載されている。

<sup>46</sup>上掲の富田淳「張廣建について」には「張廣建の收藏品の一部は、白堅の手を経て、昭和三年（1938）に三井家の有に歸した」とあるが、果たして何に據つたものであろうか。何等の典據が示されていないのがたいへん氣になるが、要は筆者の想像と一致する。

<sup>47</sup>當時湖南が記した跋には「庚戌十月（1910）初四、陶齋尚書見示唐寫説文、眞天下奇寶也。我邦

十四年（1925）、遂にこの天下の奇珍を入手する機会を得たが、すんでの所で白堅に先を越されてしまった。それを種々交渉の末、ようやく白堅から湖南に割愛する運びになった。翌年湖南の恭仁山莊を訪れ、その説文の末尾に白堅が認めた識語<sup>48</sup>によれば、彼は羅振玉より湖南の該博な學問を聞き私淑していたこともあって、江藤濤雄の説得により譲渡することに同意したのだという<sup>49</sup>。また中國は政情不安定で、典籍の災厄に遭うことが多く、この書が平安の都に藏されるのはよろこばしいとも書かれている。少なくともこの時点で白堅と京都學派とのあいだに繋がりが出来たことは間違いない。

昭和6年（1931）4月27日、東方文化學院京都研究所が外務省の岩村成允書記官に提出した『東方學報・京都』の配布先リストの末尾近くに白堅の名が見えている<sup>50</sup>。このリストには先ず圖書館、大學、研究所等の機關が列擧され、次いで個人名が擧げられているのだが、個人の場合はほとんどが大學の教授など著名な學者乃至文化人であって、白堅のような存在は極めて異例である。中國人としては他に錢稻孫の名が見えるが、それは泉壽文庫として擧げられているので<sup>51</sup>、個人としては白堅が唯一の例とも言える。白堅が如何に京都の中國學界に食い入っていたかを示す事實といえよう。白堅はしばしば日本に来ていたらしく<sup>52</sup>、その主たる

亦曾有此書數行、今已不知落在、可惜。同觀者狩野直喜、小川琢治、瀧精一、富岡謙藏、濱田耕作也。日本内藤虎次郎拜識」とある。また歸國後、明治四十四年（1911）二月十一、十二兩日に催された「報告展覽會」には、この寫本の寫眞が「端方氏藏」として展示されている。『京都帝國大學文科大學清國派遣員報告展覽會目録』、19頁。

<sup>48</sup>杏雨書屋編『新修恭仁山莊善本書影』掲載の寫眞による。その10頁を見よ。

<sup>49</sup>但しこの場合も實際の取引には仲介者があり、それは湖南愛顧の博文堂原田氏であった。湖南の博文堂宛書簡（一は大正14年（1925）12月9日付原田庄左衛門宛、一は同12月22日付息子の原田悟朗宛、『内藤湖南全集』第14卷所收、その569、570頁）は、白堅の識語とは異なりずっと實務的な事柄が書かれていて、入手価格は約三千圓、搬送には慎重を期して外務省の公文便を使ったことなどが分かる。白堅が湖南の華甲記念に贈呈したという美談として語られることもあるが、實際には明々白々たる賣買であった。

<sup>50</sup>外務省外交史料館所藏の東方文化事業關係ファイル「東方學報の配布先に關する件」（6-162-5）。

<sup>51</sup>泉壽文庫は錢稻孫が私邸で經營していた日本書を中心とするコレクション。このリストでは錢稻孫の名が錢湯孫と書かれているが、もちろん誤記である。

<sup>52</sup>董康が〔民國〕二十三年（1934）一月に長崎から上海へ向かった際の日記に次ぎのようにある。「二十一日、晴。晨起、檢點行篋。九時、見窓外長崎丸停泊山下。別居停主人、詣領事署辭行、時（張）羽生領事尚偃臥、至東濱町二枝鼈甲店購飾物數事。登舟遇南京總領事須磨、靜嘉堂文庫職員今關竝白堅甫、今關贈余四僧詩一冊。堅甫則由長春回、詢問遼左情形、與日本新聞無異。午後一時出帆、遙見羽生在海岸致別、蓋伊來時余適在客座與諸人談話、瞬即箏鳴、遂倉卒登陸也。四時許、風浪驟作。晚餐僅五六人。預作函致小林」（『書舶庸譚』卷七）。これによれば白堅は1933年の暮れに東北の長春に向き、1934年1月日本に來たり、また上海に去ったらしい。これは一例に過ぎないが、問題の1935年の前年のことである。この時期、毎年のように日中間を往來していたことが推測できる。京都大學人文科學研究所に漢魏石經の拓本集「漢熹平石經殘字」（民國二十四年拓本）「漢熹平石經殘字」（民國二十五年西充白氏拓本）「魏正始石經殘字」（民國白堅輯、民國二十四年拓本）「魏正始石經殘字」（民國二十四年西戎白氏拓本）及び『魏正始三體石經五碑殘石記一卷』

目的はいずれも商用だったと思われる。1929年、傅増湘父子に同行して日本に来たときなどは、通譯を期待していた傅増湘を旅舎に置いたまま自分の用事に走り回っていたために、すこぶる傅増湘の機嫌を損ねたりした（【資料8】）。

以上くぐぐと白堅の文物賣却について述べてきたのは、李盛鐸舊藏敦煌寫本が李滂から白堅を通じて羽田亨の手に歸した事実につき直接の證據が存在しない現在、出来る限りの情況證據を提出しようという意圖からである。白堅はそれまでも敦煌・吐魯番文獻を中村不折や三井家に賣却した経験があり、日本におけるこうした文物に対する強い興味を十分に承知していた。京都の學者との交際が深まるにつれ、京都でも敦煌寫本に対する需要があることがよく分かったに違いない。とくに羽田亨には敦煌寫本の蒐集を組織的に進めようという考えがあり、經費面でも有力な後ろ盾を持っていたから、或いは日頃から白堅に敦煌寫本購入の斡旋を依頼していた可能性もある。したがって李滂が李家の敦煌寫本を讓渡する意志のあることを聞いたとき、一も二もなく話が纏まったのであろうと想像する。『東京朝日』の記事に「京都帝大羽田博士等に愛され」とか、「京都帝大の羽田教授から博士論文を出して見てはという話があった」とかということが紹介されているのは（【資料3-1】）、白堅の談話に基づくものであることは言うまでもないが、白堅が殊更に羽田の名を出しているところなどは、その直前に京都で羽田と會ったときの印象がなお脳裡にあったためと思われる。

### その後の白堅

職業柄とも言えようが、白堅は李滂に比べるとその行動範囲が格段に廣く、交友關係も極めて豊富である。そのためもあってか、白堅の名は様々な文獻に散見する。本稿の目的からは多少逸れる嫌いはあるが、その後の白堅の動靜について管見に入った事實の二三を紹介しておこう。すべて文物に関わる事柄である。

まず1937年の末、白堅は陸機の「平復帖」を日本に轉賣するために入手しようとして果たせなかったことがある。中國の國寶級文物であるこの書跡は、當時溥儒（心畬）の所藏であった。その頃溥儒の持っていた韓幹「照夜白圖」が上海の商人によって外國に賣られたことを聞いた張伯駒は、この書跡も外國に流出するのではないかと恐れ、傅増湘の仲介で、白堅と競いながらかなりの無理をして購入した。購入價格四萬元。白堅は日本人に轉賣すれば二十萬でも容易に賣れると

---

（民國二十五年西戎白氏與石居排印本）が所藏されている。すべて白堅が東方文化學院京都研究所に寄贈したもので、圖書室保管のカード目録によれば「白堅甫先生捐」「白山甫先生捐」「白山甫君捐」などと注記されている。おそらく白堅が自ら持参したものと想像され、この想像が間違いでなければ、白堅は1935年に加えて、1936年にも京都の研究所を訪問していたことになる。

言ったと伝えられている<sup>53</sup>。1956年、張伯駒はそれを國家に捐贈し、現在は故宮博物院の所藏となっている。白堅は文物の入手には相當の手腕を有していたようで、彼の手を経て多くの逸品が日本に渡っている。しかし常にうまくいったわけではなく、時には失敗もあった。このエピソードは正に失敗の一例である。

1942年末<sup>54</sup>、日本軍の一部隊により南京で玄奘三蔵の遺骨が発見され、大きな話題となったことがある。その遺骨を日本軍から當時の南京政府に移管することになり、翌1943年の2月23日、中國側は褚民誼外交部長、日本側は重光葵大使をはじめとする官民多数が出席して盛大な移交儀式が舉行された<sup>55</sup>。その時、同時に分骨が行われ、玄奘の遺骨は五分された。一は洛陽の白馬寺に送り、一は廣東の七十二烈士の墓に合葬し、一は日本大使館を通じて東京へ、一は南京に留めて九華寺に安置し、さらに最後の一は北京に送ることになった。その北京への移送に当たった人物の中に、南京住民の代表として白堅がいたらしい<sup>56</sup>。してみると白堅はこの時期、南京に住んでいたことになるが、『中日文化協會兩周紀年特刊』（1943）の末尾に載せる「南京中日文化協會會員名冊」にも「白堅」の名が見えるから、たぶんその通りなのであろう。上で見た北京師範學院の職はこの時すでに辞していたのかも知れない。ただ白堅はまた1943年（昭和18年、民國32年）の10月時点で、華北民衆團體反共大同盟理事長として「正義日本の往事に立還れ」という談話を残している<sup>57</sup>、ずっと南京に居たかどうかは分からない。あるいは玄奘の遺骨を搬送したあとも北京に留まったのかもしれない。ここまでが戦前期における白堅の動静である。

<sup>53</sup>張伯駒『春游紀夢』「陸士衡平復帖」、新世紀萬有文庫之一、遼寧教育出版社、1998年、4-5頁。

<sup>54</sup>正確には民國三十一年十二月二十三日。

<sup>55</sup>春日禮智「玄奘三蔵の遺骨発見」『ひのもと』昭和18年（1943）5月號、37-39頁、谷田闕次「大報恩寺三蔵塔遺址發掘の顛末」『支那佛教史學』第7卷第3號（1944年）、13-20頁を参照。特に後者は發掘後實際の調査に当たった擔當者の報告として貴重である。

<sup>56</sup>他には南京の佛教會を代表して寶華寺の妙原和尚、北京の臨時政府から出馬を要請された五臺山の爽癡大師、さらに官界を代表して參贊武官の張恒などが移送のため準備された飛行機に同乗した。当事者の一人である張恒が後年その時の様子を書き留めている。張恒「在南京發見的唐玄奘遺骨」『江蘇文史資料選輯』第10輯、1982年12月、江蘇人民出版社、227-229頁。この一文によると、その時の様子は次のようであったらしい。當時の雰囲気の一部を伝えるエピソードである。飛行機が飛び立つと、妙原和尚が言った。「爽癡大師、あなたは北京の佛教會から派遣された特使ですから、骨箱を持って真ん中に座らねばなりません。昔の沙悟淨のお役目です。白堅居士、あなたは白馬の化身かも知れませんが、爽癡の一つ前の席に座って三蔵法師があなたに騎っているかたちにしましょう。張恒氏は武官でもあり、中央から派遣された正使ですから、右側に座って三蔵をお守りする責任を負って下さい。もちろん孫悟空のお役目です。わたくしめは小さな寺の和尚にすぎず、學問も浅いので、せいぜい猪八戒というところです。」

<sup>57</sup>木村英夫『民族の咆哮—秘録・聖戰と皇軍その實態』（1995年、東京：雲母書房刊）、310～314頁。編者の木村氏は、白堅を紹介して「氏は華北に本據を有する反共大同盟及敬天會の指導的地位にある老闘士である」と書いている。

新中國の建國は、それまで日本に極めて近い立場にあった白堅には厳しい時代の到來であったことが豫想されるが、詳しいことは分からない。ただ白堅の晩年の姿が一、二伝えられているので、それを紹介しておこう。

1955年のことである。すこぶる金石書畫に興味のある老人が偶然、重慶市郊外の化龍橋李子壩の骨董の屋台で古い小さな硯を發見した。これまでの経験から一見してその價值を見出した老人はすぐさまそれを購入した。やがてこの硯は友人の白隆平（すなわち白堅）によって北京にもたらされ、當時吉林省博物館の館長であった張伯駒に賣却された。この古硯こそ曹寅舊藏にして、『紅樓夢』ゆかりの珍品“脂硯”であった<sup>58</sup>。上で見たように、張伯駒はかつて陸機の「平復帖」を競った相手であったが、今回は白堅のほうから賣り込みに来ることとなったのは因縁であろうか。

さらに1961年のある日のこと、白堅夫と名乗る老人が鄧拓のもとを訪れた。蘇東坡の「瀟湘竹石圖」を賣りたいというのである。蘇東坡の藝術に深い關心を抱いていた鄧拓は、一見してこの畫幅に魅せられ、5000元という大金を工面して白堅から購入した。一方白堅は、鄧拓のところへ来る以前、買い手を求めて諸方を尋ねる中、贋物と疑われたこともあり憤懣やるかたない思いを抱いていたが、鄧拓が正當に評價してくれたことに對し、まさに知音に巡り會ったと満悦至極であったという。鄧拓がこの繪畫を購入したことで、後に中國文化界に大きな波紋を引き起こすことになるが、あまりにも本稿の主題から逸れるので、ここではそれに觸れない<sup>59</sup>。いずれにせよ晩年の白堅が經濟的に行き詰まり、手許に残った所藏品

<sup>58</sup>現在、長春の吉林省博物館所藏。胡邦煒「脂硯芳踪——一件與曹雪芹有關的歷史文物的故事」『歷史知識』1981年第4期、53-56頁。この文章にも注記してあるが、白隆平は即ち白堅その人である。周汝昌『紅樓夢新證』（増訂本）、1976年、人民文學出版社、940頁に「脂硯即端方舊藏、由重慶白堅甫攜來北京」とある。白隆平という名はおそらく戦後になって白堅が用いた化名であろう。近年ネット上で公開されている玄奘遺骨に関する雑多な記事にも、白堅ではなく白隆平の名を用いるものが多いが、当時すでにこの名を用いていたものではない。おそらく白隆平が白堅であると知る人物が、玄奘遺骨移管式典について言及する際に、後の名を使用したのが典據となり、それが轉々コピーされているものと思われる。ちなみに白堅自身も早くから古硯に興味を持っていたらしく、1928年（民國17年）1月、後藤朝太郎の來燕を機縁に開催された「中日古硯會」に所藏品を出品している。『文字同盟』第11號（1928）“學藝大事記、一月”に「楊嘯谷、謝樹生、袁勵準、白堅甫等、均陳列其所珍藏之逸品。而葉恭綽、辜鴻銘、袁勵準等、亦來參觀」とある。

<sup>59</sup>その顛末については、蘇雙碧・王宏志「鄧拓收購名畫迪風波」『炎黄春秋』、2002年11期（総第128期）、65-68頁を参照。ところで該文に據れば、白堅は「瀟湘竹石圖」と同時期に蘇東坡の別の畫卷「枯木怪石圖」も購入所持していたが、こちらは早い時期に日本に賣ってしまったという。かつてこの繪畫が日本の某氏藏であったのは確かなようだが、現在は所在不明である。日本では「枯木竹石圖」とも呼ばれ、これまで『書道全集』第15卷「中國・宋I」（平凡社、1954年刊）の圖版90、Oswald Sirén, *Chinese Painting* (London & New York, 1956-58), Vol.III, Plate 180などにその寫眞が掲載されている。また湊信幸「宋人筆とされる枯木竹石圖について」『鈴木敬先生選曆記念』中國繪畫史論集』（吉川弘文館、1981年刊）241頁の注(25)にも言及がある。



を切り賣りすることで生計を立てていたことが窺われる。また一方で、これまでの自身の経歴と鑑識眼に対する自負心を失っていなかったことも想像できる。以上、書畫等の取引を中心として白堅の経歴を辿ってきたが、感心させられるのは白堅の關與した文物がみなそれぞれに極めつけの一級品であったことであり、この方面における彼の見識の高さを認識させられる。

### おわりに

なんども繰り返すが、李盛鐸舊藏敦煌寫本が白堅の手を経て羽田亨の手中に歸したという直接的な證據は何一つ存在しない。しかし白堅がその他の敦煌吐魯番寫本に關與した経緯と、李滂と白堅をめぐる当時の様々な状況とを総合すると、この二人が核心的な役割を演じた可能性は極めて大きいと考えられる。李滂は母の生國に對して心情的に強い親近感を抱いており、李家の敦煌寫本を日本に賣り渡すことに心理的な抵抗はなかったであろう。問題は如何にして買い手を探すかである。白堅は日本の市場動向を人一倍熟知し、最良の顧客を嗅ぎ分ける能力では餘人の追隨を許さないプロフェッショナルであったが、買い手に供給する良質の商品が常に必要であった。兩者の思惑は完全に一致していたのである。新聞紙上を賑わした母親探しの美談の背後で、この重要な取引が成立していたとすれば、非常に興味深いことと言わねばならない。

### 白堅關連年表

この年表は白堅自身に關わるものを主とするが、直接關係する證據のない事項についても参考として掲出した。それらは網掛けで標示してある。

年次	出來事
1883 (明治 16 年、光緒 9 年)	出生 (四川西充の人)
1922 (大正 11 年、民國 11 年)	12 月、中村不折、王樹枏所藏古寫經 28 卷及 8 帖を田中文求堂より二萬圓で購入。
1924 (大正 13 年、民國 13 年)	王樹枏より晉寫本陳壽三國志吳志殘卷を重價で購入 (後、武居綾藏を経て、朝日新聞の上野家に歸す。)
1925 (大正 14 年、民國 14 年)	12 月、内藤湖南、白堅より唐寫本説文を譲り受ける。
1928 (昭和 3 年、民國 17 年)	北京に於いて開催された「中日古硯會」に出品。
1928 (昭和 3 年、民國 17 年)	この年、梁素文の吐魯番寫本の多數を購入。

1928 (昭和 3 年、民國 17 年)	北三井家、田中三郎より張廣建舊藏の古寫經 131 點を 16,500 圓で購入。
1929 (昭和 4 年、民國 18 年)	9 月、傳增湘とともに日本に来る。
1930 (昭和 5 年、民國 19 年)	『漢石經殘石集』『景真本東坡潁州禱雨詩話』一卷附考證一卷を上梓。晉寫本三國志殘卷を武居綾藏氏に譲渡。また同じ頃、別の三國志殘卷を中村不折に譲る。
1931 (昭和 6 年、民國 20 年)	張元濟、傳增湘の爲に上海、天津間を往復。
1931 (昭和 6 年、民國 20 年)	『東方學報・京都』の配布先リストに白堅の名あり。
1934 (昭和 9 年、民國 23 年)	年初、日本に来たる。
1935 (昭和 10 年、民國 24 年)	7 月～9 月來日し李滂の母横溝氏を搜索。羽田亨と李家の敦煌寫本讓渡につき折衝 (?)。
1936 (昭和 11 年、民國 25 年)	2 月以降、羽田亨、李盛鐸所藏の敦煌寫本を陸續入手。
1936 (昭和 11 年、民國 25 年)	『魏正始三體石經五碑殘石記』を上海で刊行。
1943 (昭和 18 年、民國 32 年)	春 2 月 23 日、南京で玄奘三藏遺骨の移交儀式に参加。
1943 (昭和 18 年、民國 32 年)	10 月、華北民衆團體反共大同盟理事長として「正義日本の往事に立還れ」という談話を残す。
1955 (昭和 30 年)	曹寅舊藏の“脂硯”を張白駒に賣却。
1961 (昭和 36 年)	蘇東坡「瀟湘竹石圖」を 5,000 円で鄧拓に賣却。

### 【資料 1】生母横溝宜人傳略

生母横溝氏諱菊子，日本國埼玉縣人，後居東京吳服橋畔，以受優婆夷戒法，號梅薰貞香。光緒乙巳，家大人先後拜出使比利時國及考察各國政治大臣之命，以是年十二月蒞。明治天皇款洽優渥居芝離宮。時母年二十五，議侍家大人赴比國，與在滬眷屬同行，居使署凡三載，温恭淑慎，克盡厥職，歲丁未十月八日生少微。宣統己酉隨侍還朝，至天津寓香山唐少川丈別墅，適得東京訊，以親老病劇，歸甯情切，時時啜泣，家大人感其誠許之。時少微甫離懷抱，顧復恩甚，憐戀小子，淚忽忽承映，悲咽不成聲，蓋人生之慘酷矣。癸丑夏，家大人再游日本，謁明治天皇桃山御陵。後至東京，母來會，欲相將返國，但以親年益耄，侍養無人，躊躇再四，實難兩全。因以玩具寄賜曰：“使兒他日睹物興懷，毋忘海外有母也。”少微童昏，不知其悲。泊長念母，始切形諸夢寐，疊向東友訪詢，卒无確耗，默計異日學成自立，當親往海東訪省，以伸烏私，以慰聖善。今歲之秋，西充白山夫堅渡日本，少微重懇探詢，因晤岡本小枝子、小林萬子兩女史，始審吾母以大正三年歲在甲寅一月二十二日卒于東京芝區金杉町寓所，計年三十有四，葬于本鄉區駒込吉祥寺佛殿之前。烏虜有願未償，吾母竟長逝耶。睽隔遼遠，存沒不聞，生缺定省，死阻音問，東望海天，椎胸泣血。有兒如斯，抱恨曷極，悲夫悲夫，謹濡淚和墨，書其大略。先後助少微尋訪母氏者，西充白君外，有天津李鶴仙松年、日本結城畫伯素明、白岩子雲丈龍平、江藤氏濤雄、和田氏昇一、埶識于末，以誌不諼。

倉龍乙亥孟冬 德化李少微泣譔  
（『李母橫溝宜人傳略』1935年刊より）

**【資料2】讀李子少微生母橫溝宜人傳略書後**

…(前略)…今年春少微十兄在上海相晤，一日語堅曰：“吾固家大人之庶子也。生母姓橫溝氏，名曰菊子，日本人也。別而還國廿五六年矣。缺絕音郵，思欲見之，其道無由。子時往日本，冀爲尋之。”堅感其至誠曰：“諾。”即馳書東京之友江藤濤雄氏，乞其留意也。未幾得江藤書曰：“感李孝子至誠，已多方尋之，未能得。昨者詢諸卜人，卜人曰：‘橫溝氏爲秋田縣人，今固生存，不久當見之云。’”七月之末，堅游東京，思因江藤氏而獲見之也。待之五旬，終不獲也。九月九日結城素明畫伯召余飲，因爲語李子尋母之事。畫伯曰：“茲事舍訪之警視廳，終無得也。聽中之一國人名至悉，爾者有八十年前之一人，憑之得其所往蹤跡，可概見也。”翌朝因往警視廳人事相談課，具道其詳。其第九席主者，主尋人蹤跡者也。俄而新聞記者紛集，不移時而孝子尋親新聞徧全國矣。十一日朝侵曉，有岡本小枝子女史者來余所居之山王旅館，出寫真一紙曰：“此李子所尋之母也。沒已二十二年矣。葬之吉祥寺域中。”即驅車與結城畫伯偕詣吉祥寺，得其墓而掃拜之。至是乃得其詳焉。…(後略)…

乙亥歲十月中西充白堅識於天津  
（『李母橫溝宜人傳略』1935年刊より）

**【資料3-1】友人に託して探す支那の青年學徒、尋ねるは橫溝菊子（秋田縣人）さん。警視廳でも一肌脱ぐ、國際「臉の母」。**

かつての駐日支那公使を父とし日本婦人を母として生れ、今は眞摯な考古學の研究者として天津日本租界秋山街二〇一に住む親日學徒李昭睦（30）が幼くして別れた臉の母を何とかして探し出したいと友人を介して九日警視廳人事相談係に頼み込んだ—李君の父李盛金氏は三十二、三年前支那公使として東京に駐在しているが、やがてベルギー公使に榮轉した。その時同伴した日本婦人橫溝菊子さんが今李昭睦君の尋ねる臉の母である。ベルギーで一子李君が呱呱の聲をあげてから三年程して母は夫と愛兒に別れて一人日本に歸國したといふまでがハッキリしている事實で、そのご父盛金氏は支那に歸って國民政府參議院々長の要職につき、一子李君は長ずるに及んで我國に學び、京都帝大羽田博士等に愛され考古學の研究者として有數な今日を築き上げたが、愈母戀しさがつり、かつて日本に遊學の際も易者に見て貰ったり友人に色々智恵を借りたりしたが、秋田縣人橫溝菊子だけではどうにも仕様がなく今日に及んだ。最近友人であり同じく考古學の研究者、上海佛租界姚之教路樹德坊三街六號白堅氏が日本へ視察の途に上るのを知って、同氏に母のことを詳しく話して助力を依頼した。白堅氏も李君の心情に同情し今赤坂山王ホテルに滞在しているが、一日日本畫家結城素明氏に相談したところ警視廳人事相談係に行つて見なさいと教へられて同係に頼み込んだもので、同係でも李君のあはれな心情に打たれ早速防犯係に移して臉の母秋田縣人橫溝菊子さん（現在五十二三歳?）を探してやることになった。

“見つかれば天津へ同伴する。李君の心情を語る白氏。”山王ホテルで李氏は語る。「李君は年は若い支那古版本の研究では世界的權威です。京都帝大の羽田教授から博士論文を出して見てはという話があったが、父君から—お前はまだ若い、もっと深く研究するまで待て—といはれたので日本の大學へ論文は出さないでいる。しかし日本の學界にも認められてゐる青年學徒です。將來中日兩國親善の楔として大いに役立つ人であらうと思ひます。ただ心配なのは同君が南京政府に關係する仕事をしている關係上、半分日本人だと判

れば、排日の連中に憎まれて仕事に支障を来しはしないかということです。それで成るだけ、本人の名を公表しないでこつそり母親を探さうとしたのですが、それでは一向埒があかないので、警視廳へお願いした譯です。若し母親が見付き、そして事情が許せば、李君は日本訪問の上、天津へその方を連れて行く積りでゐます。また私は未だ二、三週間滞在しますので、早く判明すれば、都合によっては、私が天津までお連れしてもいゝと考へてゐます。」（『東京朝日新聞』、昭和10年9月10日夕刊第二面）

**【資料3-2】若き支那考古學者の悩み、日本の母いづこ。卅年前の駐日公使李氏の息、警視廳へ探查願ひ。**

いまは支那の少壯考古學者である元駐日支那公使の令息が「生みの母親」の日本婦人を慕ってその捜査方を頼みこんできた—八日朝のこと、目下赤坂の山王ホテルに滞在中の白堅（52）氏といふ支那の考古學者が警視廳の防犯係を訪れて「友人の息子が母親の日本婦人に會ひたがっていますからどうか探してやつてください」と願ひ出たが、その友人といふのは卅年前に駐日支那公使（後に北京政府の參議院議長）であった人、いまは上海に在住して餘生を送る李盛鐸（78）氏、そして當の令息といふのは李昭睦（30）氏＝假名＝といつていま支那一流の考古學者である。話は卅年前にさかのぼつて李盛鐸氏がまだ駐日公使として日本に在任中秋田縣人の横溝菊（52）さんといふ日本婦人と懇ろになつてその間に生れたのが昭睦君だつたが、その後李盛鐸氏はベルギー公使となつて彼の地に赴任することになつたので「お菊さん」と別れたうへ昭睦君ただ一人をつれて日本の土地を去つてしまつた。ところがいたいけなその昭睦君が大きくなつてからのこと父親李盛鐸氏は「お前のお母さんは日本婦人である」といふ祕密をうちあげたので、生みの母親戀しさの昭睦君は「なんとかして一眼お母さんに會ひたい」と矢も楯もたまらず、數年前にもわざわざ日本に人をよこして探させたけれども慕ふ母親の消息は杳としてわからなかつた。ところで昭睦君はいまでは天津の日本租界秋山街二〇一に居をかまへて立派な考古學者として成人してゐるので「立派に成人したこの自分をぜひとも母親に見せて喜ばせたい」といふ念願を起して易者に母親の安否を占はせたところ「存命中」と出たので大喜び、考古學の研究のため渡日する白堅氏に母親「お菊さん」の捜査方を頼んだので、三週間前に上京した白堅氏は友人の結城素明畫伯と相談のうへ警視廳に出頭したものである。

“母の血を引く親日家、白堅氏は語る。”山王ホテルに滞在中の白堅氏は語る。「李盛鐸さんは江西省九江縣の人で今から卅二年前支那の光緒廿四年に駐日公使として二年間日本に滞在しました。その後歐米視察などして白耳義公使に歴任し、第一次革命の際には山西省民政官をやりました。晩年は參議院の議長として活躍された名望家で、昭睦さんも父の血を引いた立派な政治家です。この八月はじめ私が美術の研究で日本に渡るといふのを聞いてかねてから母戀しさに悶えてみた昭睦さんはその切な心持を私に打開けどうか東京に行つたら日本の母親を探してくれないかと頼まれました。昭睦さんはまだ日本に來たこともなく日本語も出來ませんが母の血をひくだけに立派な親日家で目下天津で南京政府の仕事を手傳つてをります。」（『讀賣新聞』、昭和10年9月10日夕刊第二面）

**【資料3-3】**

**險に残る日本の母、慕ふ今様「和藤内」。元駐日公使の息、思ひ餘り警視廳に捜査を頼む。**

三週間前から山王ホテルに滞在中の支那の考古學者、上海佛租界姚主教路樹德坊三の六、白堅氏（52）は九日朝、警視廳に吉岡防犯係長を訪れ、知人の天津日本租界在住李昭緯氏の依頼によって李氏が廿七年前に生別した實母、横溝菊子さんの捜査を願ひ出た。李昭緯氏

の父は廿年ほど前に駐日公使であった李盛鐸氏(78)で、そのころ支那公使館に雇はれてみたのが横溝菊子さんであった。李公使はその後ベルギー駐在公使に轉任し菊子さんを伴って赴任し同地で生れたのが李昭緯氏であった。それから昭緯氏が三つの時ある事情から菊子さんは別れて日本へ歸ったもので。爾來廿七年李公使は今は政界を引退して悠々自適の生活を送り、昭緯氏は天津で考古學の研究に没頭してゐるが、日支間の空氣が緊張するや同氏は日支親善の楔となって活躍するかたはら、臉の母を捜して東奔西走している。このほど前期の白堅氏が渡日するに際し同氏に母の搜索を依頼したもので、白氏は知人の結城素明畫伯に相談した結果、警視廳に願ひ出たものである。父の李盛鐸氏は進士出身の老官僚で、日清戦後駐日公使をすること二年後ベルギー公使、山西提法使、山西民政長、江西省議員、參政院參政を経て宣統六年農商總長、同八年參議院議長となり、後閑地についた。

“秋田の婦人 白堅氏の談。”「李昭緯さんは年は若いがある有名な考古學者で、内藤湖南博士にも知られてゐます。三歳の時に別れた母親に是非會ひたいとの一念から日本の占ひにもたのんだり苦心して捜してゐます。横溝菊子といふ方はたしか秋田縣の生れだとか聞いてゐます。私はこれから京都に行って捜査をお願いする豫定です。」(『東京日日新聞』、昭和10年9月10日夕刊第二面)

#### 【資料4-1】國際臉の母。廿年前に世を去り、今は幻の母に。白國から歸り寂しい晩年。白堅氏もガッカリ。

支那の生年學徒李昭睦氏(30)が友人白堅氏を介して遠く異國日本に探す臉の母横溝菊子さんは既に二十一年前病死して今は「梅熏貞香信女」の戒名も淋しく駒込吉祥寺の墓地に眠るまぼろしの母と化し去っている事が判った。

十日朝杉竝區天沼二ノ五七一岡本小枝子さんという婦人が赤坂山王ホテルに白堅氏を訪ね、「お探しになつてられる菊子さんはもうこの世の人ではありません」と悲しい一言を前置きに一切の事情を告げた。それによると菊子さんは若い頃法學博士高野岩三郎氏の令兄房太郎氏に嫁してその間二女をもうけたが、房太郎氏は間もなく青島で客死したので同女は二女を引きつれて上京してきた。李氏の父盛金公使に伴われてベルギーに渡つたのはその頃のことであった。ベルギーから歸朝してからはどうした事情か芝區金杉二ノ二七に一人淋しく暮らしていたが、大正三年七月二日死亡、その後高野家の同情で房太郎氏の墓と竝んで埋葬されているというのである。白堅氏は早速警視廳に出頭、盡力に對して感謝したが、若い友人の落膽を思いやつか、何となく淋し氣なその姿に警視廳の人々も痛く心を打たれていた。

“小枝子さん語る。”杉竝區天沼二ノ五七一岡本小枝子さんは語る。「二四、五年前横溝さんとは上海でお知り合いになりました。横溝さんはその前、高野房太郎さんの奥さんでしたが、高野さんが青島で客死されたので二女の中、妹のみよ子さんを連れて歸朝する途中、上海へお立ち寄りになったのです。その後東京で李さんと結婚なすった事を手紙で知りました。李さんに連れられてベルギーへ行く途中にも上海にお立ち寄りになって二、三日お遊びになったこともあります。ベルギーから歸朝後東京の親戚に身を寄せて居られてその頃私も東京に歸っていたので御交際はしていました。高野氏の方で面倒を見ていられた様です。」

“そんな子は信ぜられぬ。”(高野岩三郎博士談)〔大阪電話〕横溝きく子さんの義弟に當る大原社會問題研究所長高野岩三郎博士は菊子さんの在りし日を追憶しながら語る。「御紙の記事を見て横溝きく子という名前を見、然もベルギーにいたことがあるというので若しや

姉のことではと思ったのですが、年齢の點が符合しないし秋田縣出身とあったので同名異人だろうとあっさり考えていました。嫂のきく子は當時東京呉服橋一流の貸席の娘でパリパリの江戸ッ兒で亡兄房太郎の妻で常に行動を共にしていましたが、明治三十七年房太郎が青島で病没してからは二人の子供を連れて歸國、暫く私の許にいたことがあります。その後きく子もまだ若かったので私が足手まといの二人の子供を引取って翌明治三十八年離籍し横溝の姓に還った譯ですが、その後支那公使館に出入りしていた所から、明治三十九年公使についてベルギーへ行ったこともありました。明治四十二年頃だったでしょう、私は二度目の外遊の際ベルギーで彼女と親しく會談しました。それから間もなく單獨で歸國し大正三年東京で淋しく病氣し、その靈は私の手で懇ろに葬り、東京吉祥寺に亡兄の墓と並べて建墓し、また私がベルギーで彼女に會った時にも又歸國してからもその間に新しい子供が生まれたなどという事實は全く聞いたことがなく又信用出来ません。嫂から引取って私が親代わりとなって養育した子供達の内一人は病氣で死にましたが、姪の方は立派に成人し現在某良家に嫁いでもう母親になっています。あれから三十年も経った今日横溝きく子が臉の母だと名乗る方が出て來られても私にはどうも信ぜられないことです。」（『東京朝日新聞』、昭和10年9月11日夕刊第二面）

**【資料4-2】唐人公使の“お菊さん”、李君夢の實母は哀れ語らぬ墓石、ゆかりの吉祥寺に眠る。**

支那人を父に、日本人を母に、奇しくもいみじき星まわりの下に生をうけた支那の若き考古學者、元駐日公使李盛鐸氏の令息昭睦（30）=假名=君の國境を超えた母子愛の情熱—「母よ、生あらば出でよ」の一念はどうやら通じたが、しかし年月の流れと生死不定の人の身は哀し「おゝいとしのわが子よ」と温かき手をさし延ぶべかりしその母は、いまは言葉なき一片の白骨と化し去って、爾來廿有二星霜、異境にある異種のわが子の成人をよそに、冷めたく、靜かに眠り續けているのであった。「八百屋お七の寺」として有名な本郷駒込の吉祥寺、その境内の墓地の一隅に苔むしたさゝやかな一基の墓、戒名も「梅熏貞香信女」となにより一掬のロマンチックな匂いを残して眠るのが、その母—ピエール・ロチの「お菊さん」ならぬ、これこそ唐人公使の「お菊さん」の變わり果てた姿である。

**“お菊さん前身、高野博士令兄の妻。死別して上海から歸國後の國際愛、大正三年淋しく逝く。”**十日の朝四時頃だった、前日警視廳に捜査方を願い出て「生みの母」の出現を祈りつつ山王ホテルにまどろんでいた白堅（52）氏の暁の夢を破って電話のベルが響いた。電話の主は杉並區天沼一ノ五七一岡本小枝子（62）さんだ。「貴方のお尋ねになっている横溝菊子さんは廿二年前に亡くなっています…」という電話である。驚いた白堅氏はすぐ小枝子さんをホテルに招く一方、親身になって世話をしてくれている親友結城素明畫伯の來訪を求めた。午前八時岡本小枝子さんが山王ホテルに訪れた。上海時代からの知り合いだったという小枝子さんの話によると、横溝菊さんは大原社會問題研究所の法學博士高野岩三郎氏の實兄正金銀行員高野房太郎氏の夫人で、上海支店に勤務する房太郎氏と、もに上海に在任中夫が死亡したのでお菊さんは一兒みよ子を連れて内地へ歸った、その後當時駐日公使であった李盛鐸氏と知り合って奇しき縁しに結ばれた。明治卅二年李氏がベルギーへ轉勤したのでお菊さんも一緒に彼の地へついて行って其處で昭睦氏を産んだ（既報取残されたというのは誤り）それから幾年か、異國における夢のような生活に破綻の日が來てお菊さんは愛兒昭睦氏を李氏の手に残したまゝ、單身歸朝して芝區金杉二ノ二七に住まいをしながら高野岩三郎氏の仕送りで細々と暮らしていたが大正三年一月廿二日病を得て卅四

歳の若さで淋しく逝いてしまった。そこで岩三郎氏が施主となって高野家の菩提寺本郷駒込吉祥寺町の吉祥寺に葬られたというのだ。この意外な物語りを聞いた白堅氏は小枝子さんに案内されて、電話、畫伯と同道で吉祥寺に赴いた。同寺の墓地の一隅に苔に蔽われた一基の墓碑「高野家之墓」と刻まれた石碑がお菊さんの眠る墓であった。同寺の過去帳にも「横溝菊」の名が載っているのを探し求めた「日本の母」の變わり果てた姿に間違いないと白堅氏も涙ぐみながら黙禱を捧げた。

**“せめて李君に墓詣りさせたい。感慨の白堅氏語る。”** 墓參を終えて山王ホテルに歸った白堅氏は親友の「臉の母」が既に他界していたことを知って落膽に面を曇らして語る。「私からの知らせを待ち侘びているに違いない李昭睦君に早速知らしてあげようと思っておりますが、この話を聞いたらさぞ李君は悲しむことでしょう。岡本小枝子さんから菊子さんの晩年のことについて聞きましたが、何でも獨り淋しく暮らして餘り幸福でもなかったようでした。しかし高野岩三郎博士が兄さんの恩に酬いるという意味で菊子さん宛に毎月の生活費を送ってやっていたそうです。岡本さんのお話ではこの高野家のお墓の中に菊子さんの遺骨も葬ってあるということです。岡本さんも菊子さんのお葬式に立會われたとのことですから間違いはないと思いますが、高野博士にもう一度よく當時の事情をお伺いしてみたいと考えています。そしてはっきりと事情が判明したうえで李君も近いうちに必ず渡日してお墓參りすることでしょう。しかし李君もお母さんの晩年の模様が解ったこととて悲しみのうちにも必ず喜んでくれることゝ思います。」

**“新聞を見て思い出す。岡本さん語る。”** お菊さんが本郷吉祥寺に葬られていることを白堅氏のもとに知らせた岡本小枝子さんは當時を追想して語る。「何分この話はかれこれ廿四五年前の古いことなので私もすっかり忘れていましたが、昨日の夕方新聞を見て思い出したような次第です。そしてお菊さんのことをよく知っている私が出たらと思ひまして白堅さんにお電話したようなわけです。お菊さんが不幸にもすでに亡くなってしまわれたことは李さんには甚だお氣の毒ですがこれも運命でしょう。しかしこれで李さんもよく事情がおおわかりになって安心されることでしょう。

(『讀賣新聞』、昭和10年9月11日夕刊第二面)

#### **【資料4-3】今様「和藤内」の母、哀れ既に地下に。ロマンスに飾る數奇な半生。吉祥寺墓地に埋む。**

既報、元駐日支那公使李盛鐸氏の令息李昭緯氏が臉に残る日本の母横溝菊子さんの捜査を警視廳に依頼したといふ新聞記事を読んで十日朝杉竝區天沼二の五七一岡本小枝子さんが山王ホテルに滞在中の白堅氏を訪れ、横溝菊子さんのその後の消息をもたらしたが、岡本さんの話によって菊子さんは今は亡き人であることが確かめられた。岡本さんは菊子さんが死亡した當時、自ら施主となって葬ったといふ親しい間柄で、同女の話は次の通りである。菊子さんは法學博士高野岩三郎氏の令兄房太郎氏の夫人で、青島に生活してゐたが、房太郎氏は菊子夫人と二人の女の子を残して同地で死亡したので歸國、その後菊子さんは愛兒と別れて李公使と共にベルギーへ行って李昭緯さんを儲けたが、ある事情から菊子さんは別れて日本に歸った。そして大正三年一月廿二日卅四歳で故人となり「梅薫貞香信女」となって八百屋をお七で名高い駒込吉祥寺墓地に埋葬されたといふ。これを聞いた白堅氏は菊子さんが死亡したと聞いて非常に落膽し警視廳に出頭して盡力を謝し「日本の新聞紙の反響の大きいのに驚きました。おかげ様でこんなに早く事情がわかりましたが、すでに故人となったと聞いて氣の抜けたやうにがっかりしてしまひました」と語った。なほ白堅

氏は相談相手の結城素明畫伯ならびに岡本さんと同道、同日午前十時駒込吉祥寺に菊子さんの墓を詣でたが獨立した墓はなく故高野氏等とともに高野家の墓地に埋葬されてゐることを確め、住職の案内で高野家の墓地を展じ香華を手向けた。同寺の過去帳を繰ると「横溝きく、大正三年一月二十二日、卅四歳」と書かれてあつた。

“「せめて寫眞を愛兒へ送らう」墓參して白堅氏語る。”赤坂山王ホテルに投宿、今様「和藤内」の臉の母を李昭緯氏に代わって探す白堅氏は、十日菊子さんの消息が判明したので大喜びで語る。「今朝四時半ごろ、まだ私が寝てゐる時、未知の岡本小枝子さんといふ人から電話があり、菊子さんがもう亡くなつてゐること及びその時の模様が詳しくわかつたので、すぐホテルに来ていたゞくやうに願ひした。その後結城素明氏にもホテルへ来ていたゞき、岡本さんと三人で吉祥寺のお墓まゐりをして來ました。李さんには手紙ですぐ知らせます。また、岡本さんがもつてゐたたゞ一枚の寫眞も手紙に同封して天津に送りませう。さぞ喜ぶことゝ思います。

“大磯で亡くなつた。岡本さんの話。”「私の別れた夫が正金銀行上海支店在勤時代に菊子さんとお知り合ひになりました。もう廿四、五年前のことです。菊子さんは青島で高野房太郎氏と死別され、その後上海から東京に歸り、李さんの許に行かれたやうです。その際結婚すべく上海に來られたのですが、東京に歸つてからも暫く交際致してをりました。大正三年大磯で亡くなられましたが、高野家で死後の一切を處理したやうです。

“菊子さんの先夫、わが労働運動の先覺、高野房太郎氏。”〔保田發〕高野房太郎氏につき大内兵衛氏は語る。「横溝菊子といふ人は知りませんが、その人の夫であつたといふ高野房太郎氏は明治廿年ごろアメリカにゐて、アメリカ労働運動の先覺者として有名なゴムバースに愛され歸朝後、日本で労働運動をやつた人で、片山潜氏の先輩、日本労働運動史の第一ページに出てゐる人です。労働運動に失敗し窮乏して青島に渡り明治卅四、五年ごろ客死しました。遺兒のうち一人は倉敷紡績會社の原田技師の夫人です。」（『東京日日新聞』、昭和10年9月11日夕刊第二面）

#### 【資料5-1】白堅「晉寫本三國志吳志殘卷跋」

右晉人書吳志虞翻陸績張温傳殘卷，自翻傳權於是大怒之怒字以下，至温傳臣遠境止，計八十行，行十四、五字，有十六字者，中有蠹缺，餘存字一千九十許…（中略）…余爲西充産也，西充文獻，有史以來陳壽氏爲最尊，茲何幸此書之誤，由余小子校正之，私幸何窮，願天下治三國志者，同正斯誤也。上虞羅雪堂藏有元康年寫經，持以相校，風格姿態，正是同時，陳壽氏晉元康間人也。卷中有雌黃四處，想見當時讐校之精審。此卷出自新疆鄯善土中，今年秋至都，或曰當是北涼時，講之中土，藏之其地者。旦夕展觀，令人不知今世有蝸角蠻觸之爭。甲子冬十一月既望，西充白堅識於 門仲山甫才齋。（『支那學』第3卷第11號、大正14年8月、83頁）

#### 【資料5-2】羅福成「晉寫本三國志吳志殘卷校字記」

晉寫本古籍，中土至爲希見。此卷長五尺，計八十行，每行字數多寡不一，首尾殘缺無年月。近年出土於新疆省吐魯番，爲予友白君堅發見，遂以重值得之，珍如拱璧。（『支那學』第3卷第11號、大正14年8月、82-83頁）

#### 【資料5-3】内藤湖南「晉人寫三國志殘卷跋」

自西域墟墓石室中出古簡牘卷裘，漢晉人手跡，皆得目睹於二千載之下。但其卷裘率多佛經，至於經史百無一二。余遍閱内外收儲，其乙部最古之本爲瑞典人歇丁博士所獲於樓蘭廢



墟戰國策(燕策)斷簡，小隸書止七行。余睹諸獨國萊不窰古典館，蓋魏晉之間書也。在我邦則武居君所藏三國吳志虞翻陸績張温傳殘卷隸書八十行晉人書，出於吐魯蕃土中，爲王陶廬樹柙所獲，既歸戈齋白堅，白堅再歸之於吾友武居君。是二本者實爲宇內無上祕笈矣。古本吳志與今本異同之處，陶廬嘗舉三十三事，然尚有遺漏者。陸績傳志存儒雅，今本存作在，張温傳故屈卿行，今本故上有以字。又有校語誤者，陸張二傳皆云吳郡吳人也，元刻本毛刻本並與此同，陶廬謂今本陸傳刪吳郡二字，張傳吳郡下刪吳字者，未必然也。又虞翻傳翻子竦，今本作聳，陶廬以古本爲筆誤，張傳功冒普天，今本普作溥，陶廬謂宜從古本，則太拘古字通用者，不須改也。…(中略)…武居君已獲此本後、白堅復獲其殘簡十行，歸諸中村不折，乃虞翻傳文，宜接此本前，余獲其照片，因臨寫于左方，便讀此本者，併攷焉。昭和五年八月。(『湖南文存』卷五、今『全集』第14卷(筑摩書房、1976年)129-130頁による。)

#### 【資料6】中國歷史博物館所藏『六朝寫經殘卷』吳寶炆(宜常)跋

梁素文自新疆歸燕，所有名蹟全市于奸商白某，販售東瀛。予與白某奮鬥得購留三卷。此卷寫經十四段，前四段及第七、第八、第十、第十二、第十三各段，皆晉人書；第五、第六段六朝人書；第九、第十一、第十四各段隋唐人書。王晉老所謂科斗筆法者，實章草筆意耳。各段各有妙法，即其劣處，知非今人所能及。此我國古時文化所在，惜以個人之力未及保存于萬一也。民國戊辰(1928)吳宜常識。

(『中國歷史博物館藏法書大觀』第11卷「晉唐寫經·晉唐文書」1999年、京都、柳原書店)

#### 【資料7】張谷雛所藏敦煌石室圖籍錄序

蓋敦煌石室藏物之散出，可分爲數類，一爲史坦因所取，二爲伯希和所取，二者世已周知，三則當史坦因未至之前，已有少許散出，蓋亦王道士輩之所爲，緣村人喧傳可以治病却邪，故恆出資向道士索去供養，地方官吏亦恆有用爲饋贈者，前後當有數百卷。厥後張廣建、許承堯、莘壽樞等所得，殆皆此類，蓋出土在先而集藏在後也。張、許、莘皆于民國初年官甘肅。四則清宣統二年由學部調取後付存今北平圖書館之九千餘卷，其到京以後之中飽，誠如谷雛所聞，其時官中冊報有卷數而無名稱及行款字數，故一卷得分爲二三，以符原數，其精英皆歸李氏，次及劉幼雲廷琛，李之親家。又次及李之戚友，其得分惠二三卷至十數卷者亦不鮮。五則史坦因伯希和以外德意志、日本、美利堅各圖書館，亦曾得大批，其時間不詳，殆皆在運交學部之前或隨後別于當地搜購者。

綜上所述，由敦煌整批流出之圖籍，不外此數。厥後張廣建所得約二百卷，大半歸西充白堅，以後聞又散出，許承堯所得分批售出，余曾與友人共購得七八十卷，餘皆零售，莫可踪迹。莘壽樞所得不少，或尚在其家。其散在國外者，聞英、美、德、法今皆無恙，獨日本所得藏之旅順圖書館者，恐已毀失矣。

至李、劉、何所得，何早卒，除其生前贈友者外，餘聞亦歸李氏。世僉知李、劉二氏多佛經以外之，偶露鱗爪，固難窺其秘也。近年李、劉皆去世，所藏始分別散出，余曾介南京圖書館購入二百餘卷。聞劉氏有佳品約百卷歸于張君厚，張固劉戚也。李所藏由家屬析分，各售不復能聚，谷雛所得，殆即其類。抑李氏藏品亦有由市賈轉售而加以裝飾附會者，此亦不止李氏藏品爲然。北方敦煌各品，均有仿制，以畫壁最爲流行，造像次之，經卷最少，以書法不易仿也。間有以真迹剩紙仿寫者，其僞易售，然細辨終能別也。谷雛所藏各品，固無疑義，然李氏藏明顯係市賈所加蓋，木齋無自加藏印以發其復之理，且刻工均劣，較之其藏書印章，判若霄壤，此與書畫之強補印章，同爲蛇足，明眼所宜辨也。(一九四七年冬)

(葉恭綽『矩園餘墨』，新世紀萬有文庫之一，遼寧教育出版社，1997，170-171頁)

**【資料8】己巳（1929年）東瀛訪書日記**

[九月] 十三日 至堅甫（白堅）寓、觀其新得熹平石經、極佳。又觀魏尺、唐尺。

十七日 午後抵長崎。過崇福寺。

十九日 游雌雄瀧（注：神戸の布引の瀧）。六點半到西京。

廿四日 到此已五日，堅甫辨己事他去，我父子語言不通，困居旅舍，不能出游，煩悶異常，聊書此自遣耳。

十月初四日 余初意先住奈良，緣堅甫所事非西京不辨，而余父子均不通言語，需人而後行，故留滯西京至半月之久，擲黃金于虛牝，可惜殊甚。

（傅熹年整理『藏園日記鈔』摘錄，『文獻』2004年第2期より抜粹）